

昭和初期、宮本常一は日本各地様々な土地を歩き回り、その土地の老人達の話を取りました。無名の名もなき古老達から歴史に埋もれた庶民の生活・習慣・村の掟等を聞き取り記録として残したことは大変な偉業だったと思います。宮本に応じたその多くの人は読み書きの出来ない老人達であり宮本が記録し残さなければいつの間にか忘れ去られ消えて行ってしまう話ばかりでした。

歴史は為政者によって成り立っているものだけでなく、文字で記録されていない庶民の歴史もあることを知りました。聞き取りに応じたかれら無名の人々は今に生きる私たちに、遠い祖先の時代を生き生きと語ってくれます。

あとがきで宮本常一はこう述べています。

これらの文章ははじめ伝承者としての老人の姿を描いてみたいと思って書き始めたのであるが、途中から、今老人になっている人々が、その若い時代にどのような環境のなかをどのように生きて来たか描いてみようと思うようになった。それは単なる回顧としてでなく、現在につながる問題として老人たちの果たしてきた役割を考えてみたくなったからである。

田植えの女性たちのあけっぴろげな田植歌や各所にでてくる夜這いの話など、昔は性に対し随分と開放的だったことを知りました。土佐源氏や世間師の話など面白く読めるので本書に目を通された皆様も同様の感想をお持ちになったと思います。